

友よ 第10回

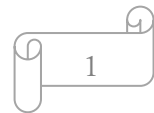
第三部  
戸次川

友よ  
第十回

赤神  
諒



第10章 羈旅



# 友よ 第10回

## 主な登場人物 第三部

長宗我部信親 ちやうそかべのぶちか

長宗我部家の御曹司。通称、弥三郎。

谷彦十郎 たにひこじゆうろう

谷忠兵衛の嫡男。信親衆の一人。

るい

長宗我部に仕える忍び。

羽床資吉 はゆかすけよし

讃岐の土豪・羽床氏の嫡男。仙石家臣。

福留隼人 ふくどめはやと

土佐随一の猛将。信親の武芸の師。

長宗我部元親 ちやうべのえん

信親の父。土佐国主。

谷忠兵衛 ちやうべのえ

元親の懐刀。元神官。信親の学問の師。

桑名太郎左衛門 さなな

長宗我部家臣。信親の弓と礼の師。

二蔵 にぞう

信親に仕える二人の近習たちの綽名。



漣

信親の妻。

十河存保 そごうのりやす

讃岐・阿波の小大名。

仙石秀久 せんごくひでひさ

羽柴秀吉の家臣。

航八

岡豊の若い川漁師。

せせらぎ

航八の幼馴染。

第十章 羈旅きりよ

——天正十四年（一五八六年）八月、摂津国・大坂城



新築の大坂城はまだ、削りたての檜ひののよい香りがする。

仙石秀久せんごくひでひさはもう一度手鏡に向かい、自慢の鼻っ柱を膨らませてみた。大事な会合の前には欠かさぬ習慣だ。今日はへ九州の役えきへ向かう四国勢の総大将が決まる。

あの信長にさえ褒められた豪傑然とした鼻っ柱は、仙石の顔における唯一最大の自慢だったが、実は若き仙石が信長に鼻を褒められて黄金一錠を賜った時は、鼻の穴の中に出来物ができ、腫れて痛かったせいで、鼻を膨らませていたのだ。

改めて確信した。やはり仙石はとことん運がいい。

四国攻めの総大将に任ぜられた二年前、仙石は長宗我部に完膚かんぷなきままでに叩きのめされ、半死半生で逃げ帰った。にもかかわらず、賤しずヶ岳がたけの戦いで大勝した秀吉は上機嫌で仙石を赦し、淡路を安堵してくれた。

秀吉に会うまで、「わしはきつと首を刎はねられる」と胃に穴が開くほど心配して、しきりに酸っぱい噫おくび気が出たくらいだから、仙石は嬉しかったというより、拍子抜けした。これほどあっさり認めてくれるなら、あんなに無理をせず、もう少し戦で手を抜けばよかったと心底

## 友よ 第10回

悔しく思ったものだ。

結局、長宗我部が秀吉に愚かな抵抗をして土佐一國に押し込められた後は、何と仙石が讃岐を拝領した。身の程知らずの大出世に、自分でも声をあげて驚いたほどだ。別段大した功を立てずとも、強運の人間には幸運が勝手に転がり込んでくるものだ。

だが、仙石も三流の男ではない。秀吉の心はちゃんとわかっていた。二流の家臣だからこそ、仙石は取り立てられたのだ。例えば黒田官くろだかん兵衛べいゑなら秀吉の座を脅かしかねないが、仙石なら万に一つもその心配はないから、安心しきって使える。だが逆に、いてもいなくてもいい家臣だから、いつでも取り潰せる。仙石はこれまでも保身のために涙ぐましいまでの努力を重ねてきたが、より一層、保身に全力を傾けねばならぬわけだ。

仙石は鏡を見ながら自慢の鼻の頭をそっと撫でた。

——今日は大事な会合じゃ。何事も、出だしが肝心ぞ。

秀吉は仙石の人物など百も承知だが、初対面の者には威厳を見せねばならぬ。秀吉からの信頼こそが威厳を醸し出せる唯一最大の源泉だが、見た目も大事だ。

今でも「長宗我部」と聞くだけで、仙石の全身にはぞっと怖おそ気が走る。ついでに尻から足にかけて糞尿がまとわり付く感触が甦り、その臭気が鼻先まで漂ってくる。初めて自分の力でやってみた戦で大負けし、己の無能を嫌というほど噛み締めた。

## 友よ 第10回

ふと仙石は、鼻翼びよくにまではみ出ているごく小さな鼻くそを見つけた。さつき鼻をかんだ時に出てきたようだ。親指を突っ込んで取るうとしたが、数本の鼻毛にしっかりとこびり付いて乾き、なかなかしつこい。躍起になってゴソゴソするうち、何やら液が垂れてきた。いじりすぎて鼻血が出た。よりによって、こんな時に……。

懐紙を取ろうと振り返った仙石は、仰天した。

背後の庭先に若い大男がかしずき、じっと仙石を見ていた。

もともと讃岐さぬきに所領を有し、長宗我部が降伏した後、仙石に仕えることになった羽床資吉はゆかすけよしだ。引田ひけたで仙石を追いかけ回した怪しからん男だが、戦場では頼りになりそうだった。かねて人質として岡豊城おかほうじょうにあり、長宗我部の内情を知っているから、役に立つと思って連れてきたのだが、頭の巡りは仙石とさして変わらず、どうやら警固けいこにしか使えぬらしかった。

「そなた、いつからそこにおったのだ？」

「四半刻しはんときほど前からでございまする」

とすれば、仙石が背を丸めて手鏡を覗き込んでいる姿をずっと見ていたわけか。

「何用じゃ？」

「特にございませぬが、殿はできる限りそばにおれと仰せになったではありませんせぬか」

警固させるために、確かにそう言った。

## 友よ 第10回

「参ったのなら、なぜひと声を掛けなんだ？」

「先だって黙っておれと、お叱りを受けましたゆえ……」

資吉は間の悪い男だった。

そばに置いてまだ一年ほどだが、仙石が宿酔ふつかよいで激しく吐いている時、音を立てて放屁した時、ちょうど虫の居所の悪い時などに決まって現れた。昨日もたまたま仙石が廊下で派手に転んだところに、資吉がいた。出来たての大坂城の廊下をピカピカに磨き上げる馬鹿がいるらしいのだが、仙石はひどい脂足あぶらあしで、だいたい足裏が汗で濡れているために、滑りやすいのだ。

「少しは自分の頭で考えてみよ。秀吉公のお城の中で、わしを襲う者が誰かおるのか？」

そもそも仙石など襲うに値しない人間だ。家中では齒牙しがにもかけられていない。

太い腕を組んで唸りながら糞真面目に考え込む資吉の間抜け面を見て、自分まで惨めに思えた。

「よい。ずっとそこに控えておれ」

讃岐の大名・仙石秀久サマを煩わづらわせた罰だ。

本来なら、庄林しょうばやし一心いっしんに今日の相談をしたかったが、実に些細なきっかけで見限られていた。四国平定後、秀吉の関白就任祝いに仙石が呼ばれた際、労いねのために庄林も連れて行ったのだが、ただでたらふく贅沢な飲み食いができると、二日近く絶食して臨んだ。当日は腹

## 友よ 第10回

がはちきれんばかりに食べ、便所で吐いてから、また食べた。確かに卑しい真似だったかも知れないが、誰かに迷惑を掛けたわけでもない。それでも、便所で吐き散らかしている仙石を見て、庄林は思うところがあったらしく、加藤清正に声を掛けられるや、これ幸いと仙石のもとを去っていった。相手が本物の豪傑では、怖くて文句のひとつも言えぬ。

——九州の役に参陣する四国勢の総大将は、誰になるのか。

仙石はこれまで、秀吉にそれとなく確かめてみたが、「まだ決めておらぬ」と面倒臭そうに返された。

家格や実績、兵力のみから言えば、当然に長宗我部が仰せつかるべきだろう。仙石ごとき葉っぱ武者の出る幕では本来ない。だが、仙石は秀吉に愚直に従い続けてきたのに対し、長宗我部は最後まで秀吉に抗い、降伏したばかりだ。

秀吉がいずれを選んでも、仙石はむろん逆らえないが、九州役の命が正式に下され、総大将が名指しされた時、仙石が誰にどのような顔をし、いかなる態度をとるかは、きちんと決めておかねば、その場で慌ててしまう。

順当に長宗我部が仙石の上に立つのなら、弱さをさらけ出すつもりだった。威厳は無用だ。即刻、放り出す。卑屈と言われようとも、生き延びるためには笑顔を作り、腰を低くせねばならぬ。もともと長宗我部のほうが仙石なんぞよりはるかに戦上手で、ずっと実力があ

## 友よ 第10回

るのだ。恥ずべき話ではないし、慣れっこだ。

これに対して、もし番狂わせで、仙石が四国勢の総大将に任ぜられたなら、話は全く逆だ。馬鹿にされてはならぬ。その時にはしっかりと鼻っ柱を膨らませて、威厳を示さねばなるまい。

土佐からやってくるのは、嫡男の長宗我部信親のぶちかだという。

引田で仙石勢を撃破し、追撃してきた若き勇将を、仙石はおろん覚えていた。信親のほうは知れぬが、あと少して殺されかけた人間は、死の恐怖を生涯忘れるものではない。まだ二十二歳だそうだが、親の威光を笠に着るだけで、土佐の大名になれるわけか。何と世の中は不公平に出来ているのだ。

仙石は太い鼻を膨らませながら、立ち上がった。

「参るぞ、資吉」

何の役にも立つまいが、体の大きな家来がいれば、それだけでそれなりに恰好も付く。

仙石は悩み抜いた末、最初はとにかくでっぷりとした余裕を見せようと決めていた。

「いやはや引田では、参りましたぞ」と笑いながら話しかける。先方からは言い出しにくかろうし、さりとて全く話題にしないのも変だ。信親は小太り小兵の仙石が顎を突き出して見上げねばならぬほどの長身だから、座ったまま軽く挨拶をしたい。そのためには、約束の刻限よりも早めに行き、座って待つほうがいいと考えた。



## 友よ 第10回

頭の中で段取りを確かめながら廊下を歩いていると、また仙石はつるりと滑りそうになった。

——いかん。足の裏を洗うのを忘れとった。

鼻っ柱を確かめた後は、足裏を洗うのが習慣だった。それを忘れたのは、資吉があんな所にいて、叱り飛ばさねばならなかったからだ。つくづく間の悪い男だ。

廊下の向こうから、長身の若者が家臣を一人伴って、談笑しながらやってくる姿が見えた。涼しげな川を思わせる水色の小袖を着ている。信親だ。こっちに気付き、手を上げ、笑いかけてくる。なぜだ。戦場でもしっかり頬当てを付けていたから、仙石の顔をはっきりと知らぬはずではないか。

意表を突かれて、仙石は戸惑った。

中途半端に手を上げながら、自分でもよくわからぬ顔つきをしたとき、後ろから資吉が「おお、若ではございませぬか！」と叫んだ。事情がわかって、慌てて手を下ろした。信親は仙石でなく、旧臣の資吉に挨拶をしたのだ。遠くでも大柄だからすぐにわかったのだろう。何と居心地の悪い話だ。

すぐ先、中庭の手前の廊下を左へ曲がれば、ひとまず鉢合わせをせずに済む。いや、待て。その先は確か侍女部屋に通じていたはずだ。何やら秀吉に誤解されると面倒だが、これ以上、気まずい思いをしたくない。だが、侍女の誰かに会ったら、何と言うのだ？ 道を間違え

## 友よ 第10回

たと答えるか。いや待て、ここはもう何度も歩いているのに、そんな  
ありがちな言い訳が通用するのか。侍女には、大名らしく偉そうな顔  
をしてよいのか、下手に出るべきか。後ろに従ってくる馬鹿に何と説  
明すべきか……。

逡巡するうち、辻に差し掛かった。

曲がるのも色々面倒くさいと思いついたが、通り過ぎる寸前まで  
来て、仙石はやはり曲がろうと決断を下した。

土壇場でくるりと踵を返そうとした時、「殿、そちらではありませ  
んぞ」と後ろから、資吉が袖に手を伸ばしてきた。

中途半端に力を入れた足が絡まり、足裏の汗で滑った。馬鹿がピカ  
ピカに磨き上げた廊下だ。仙石はすぐそばの柱を掴もうとしたが、か  
なわず、手をばたつかせ、宙を泳ぎながら、思い切り派手に転んだ。

床でひどく頭の後ろを打ちつけた。

すぐに慌ただしい足音が迫ってくる。

皆、なぜわからぬ？　こういう時は、ひとまず放っておいて欲しい  
のだ。

「いかながなされましたか？　これは、仙石殿におわしますな」

駆け付けてきた信親に、助け起こされた。

妬ましいほどの美男だ。勇敢で戦上手で、噂によれば頭もよく、家  
臣や民からも慕われている。この若者は、仙石が持っていないものを  
全部まとめて持っていた。

## 友よ 第10回

「いや、大事ござらん」

何も無い場所で突然すっ転ぶとは、情けない話だ。

仙石は長宗我部の連中に無様な姿ばかり見られていた。とにかく長宗我部は仙石の疫病神だ。こやつらが人生に現れるまでは、すべてが順調だったのだ。



二

この年の一月には、主君の元親が桑名太郎左衛門らを伴って年賀のために出仕し、秀吉から歓待を受けた。元親の土産話で聞いた噂の「黄金の茶室」を昨日見たが、別段の感慨も湧かなかった。やはり彦十郎には俗世が向いていないようだ。

そろそろ神官に戻れぬものかと、彦十郎は思案していた。長宗我部は国を失い所領を削られ、皆困っている。谷家が扶持を返上すれば少し助かるはずだ。秀吉との関係が落ち着き次第、信親が正式に長宗我部家の当主となるから、今すぐは無理だろうが。

彦十郎が控えの間で待っていると、ふんぞり返った小男が先に出てきた。

指の先を突いて形ばかり頭を下げる前に、仙石はすばやく彦十郎から目を逸らし、眼前の廊下を足音荒く去ってゆく。突き当たりの曲がり角で足が滑ったのか、危うく転びそうになりながら、廊下の向こうに消えていった。先ほど久しぶりに会った資吉は何やら不興を買

## 友よ 第10回

つたらしく、先に戻されていた。

やがて現れた長身が、白い歯を見せて笑いかけてくる。

見たこともない真っ赤な陣羽織を小袖の上から着ていた。いかにも上等な羅紗だ。

「これか？ 秀吉公から直々に賜った。俺の具足に似合いそうだ」  
「それはそれは」

初対面で相当気に入られたらしい。

「彦十郎、天守へ入る許しを頂いたぞ。改めて城内の見物をするといったそう。秀吉公は櫓にも登ってこいと仰せになった」

「また、淀川を眺めるおつもりか」

「昨日は雨霧でよう見えなんだからな。これからは行く先々で川を見たいのだ」

表御殿を出て番所を過ぎると、高い櫓があった。信親は番人に明るく声を掛け、とんとんと先に登ってゆく。

「ううむ。ここからでは淀川がよく見えんな。芦田と申す曲輪に行ってみるか」

「秀吉公はどのようなお方にございましたか」

「さすがに天下を窺う器量人よ。ゆえにこうして、降ったばかりの敵の御曹司にも、好き勝手に城の中を見せておられるわけだ」

彦十郎は辺りに人がいないのを確かめながら、低い声で尋ねた。

「肝心の九州攻めについては、何と？」

## 友よ 第10回

大坂城へ呼ばれたのは、長宗我部がその命を請けるためだった。信親は思い出したように、さらりと答える。

「こたびは仙石殿が九州役の軍監となり、長宗我部はその下で動く」  
十河そごうの地に小領を安堵された十河存保ながやすも、讃岐勢の一角として軍勢に加わるといふ。長宗我部は降伏して間がない。〈軍監〉なる名目はともかく、仙石の指図を仰ぐのは致し方ないか。

「して、仙石とは、何か話をされたのでござるか」

長宗我部の家臣たちは、かねて仙石など眼中になかった。引田の合戦で手玉に取り、完膚なきまでに撃破した敵の凡将がいた、という程度の記憶があるだけだ。

「どうも無口なお人でな」

「何も話をされななんだと？」

「仙石殿は鼻血に困って、しきりに鼻をいじっておったな。俺と秀吉公ばかり話していた」

信親はまず人の悪口を言わない。仙石の人物について一言もしないのは、褒められる点を見つけられなかったからだろう。

「秀吉公とは、何の話を？」

「たくさん話をしたぞ」

話し上手で話題も豊富な秀吉は、聞き上手でもあり、川の話までしたという。

「大坂は海に繋がる川の町だ。いかに川を使って町を豊かにするか、

## 友よ 第10回

話は尽きなんだな。四万十川の話を申し上げたら、天下静謐せいぎの後、案内せよと仰せになった。実は今宵も呼ばれておっつな。すまんが、ちと行って参る」

秀吉と信親が才氣さいき煥發かんぱつ、川談議を中心に時を忘れるほど話していた間、仙石はひたすら鼻をいじり回していたという。秀吉に心酔する若い将たちが多いと聞くが、秀吉も信親を気に入って、その仲間に加えたいのだろう。

「三流の将が四国勢の総大将とは、気懸かりでござる」

秀吉家臣団には、はるかに武名の高い将たちが幾らでもいた。長宗我部はどうも運がない。

「秀吉公の大軍が上陸するまで、四国勢は合戦無用と仰せであった。二十万の大軍が揃ってから、秀吉公のお指図に従い、戦をするのだ。負ける道理はない」

先遣隊となる四国勢はたった六千だという。理由を尋ねると、信親が笑顔を見せた。

「長宗我部は四国の民を長らく兵乱で苦しめてきた。ゆえに俺から、兵役を軽くしてくださいるよう、秀吉公にお願い申し上げたのだ。せつかく勝ち得た安寧を民に満喫してもらわねばな」

すでに土佐の国造りは始まっている。豊かな国とすべく、信親は早速手を打ったわけだ。

櫓を降りると、信親が番人に親しげにものを尋ねた。あの笑顔に接

すると、初対面の人間でもたいていは親切にする。

「俺はこれから北の曲輪へ回って淀川を見るが、お主はどうする？」

これ以上付き合わせるのは、気の毒だと思っただらしい。

「京の吉田神社に参りとう存じまする」

昨日は住吉大社に参詣したが、吉田山よしだやまは古来「神楽岡」かぐらおかと呼ばれ、親しまれている聖地だ。他に幾つも訪ねたい神社があった。信親衆の者たちも、今回の大坂行きは半ば物見遊山のもりで、信親に従いついてきた。

「好きにするがいい。されど、彦十郎。あと少して日本の乱世が終わる。せめて俺が土佐をうまく治めてゆくまで、力を貸してくれぬか」

「それには、いかほど時が掛かりましようかな」

「そうさな。五年、付き合ってくれ」

「承知」

「恩に着る」

信親は彦十郎の肩に手を置くと、いつもの笑顔を見せてから颯爽さつそうと歩き出した。



三

「讃岐勢の一手を担うとは、資吉も出世したもんじやのう」

ほんの少しの酒で酔っ払った福留隼人ふくどめはやとが、資吉の猪首いぐびに熊手のよ

うに大きな手を伸ばして太い腕を巻きつける姿は、熊と猪がじゃれ

## 友よ 第10回

合っているようにしか見えない。

大坂城の二ノ丸東に用意された信親たちの宿所は、大坂見物を終えた長宗我部家臣たちが集い、酒盛りの最中である。彦十郎が不在のため、毒舌は少なめだった。

「仙石家中はやる気のない連中ばかり。あれで本当に戦ができるのか、心配で堪りませぬ」

「引田では、われら相手に奮闘した者たちもいた」

信親が口を挟むと、資吉がかぶりを振った。

「その者たちが戦死したり、仙石家を見限っておりましてな。上も下も互いに馬鹿にし合って、大将以下、ろくな連中が残っておらんのでござる」

「何じゃ、資吉。もしや、わしが引田で暴れたせいじゃと言いたいのか？ ん？」

隼人が資吉の首を締め上げている隣では、鼠顔の桑名が口を尖らせ、酒を啜すすっている。へ河内かわちの出群いずむれという逸品だ。信親にも勧めてくれて、なかなか美味しくだったが、空になるのを恐れてか、三杯目からは注いでくれなくなった。

「こたび四国勢は先に九州へ渡って、本軍の到着を待っただけの役回り。物見遊山も同じよ。誰が総大将でも、案ずるには及ぶまいて。さようにございますな、若殿？」

桑名が手酌で自分の杯に酒を注いでいる。



## 友よ 第10回

「勝利は見えているが、俺たちには、九州に覇を唱えながら天下を敵に回す島津殿の心の裡うちがわかるはずだ」

土佐と薩摩は十年來、廻船かいせんを就航させて交易があり、共に大友家と敵対していた関係もあって、誼よしみを通じてきた。

「島津が戦わずして降りはずまい。緒戦は避けられぬにせよ、一人でも多くの者が死なずに済むよう、攻め下る途中で、島津殿を説けぬものかと思っている。実は今日、俺から秀吉公にも申し上げたところ、諒とされた」

長宗我部が天下泰平の一助となれるなら、四国統一戦で死んだ将兵たちも浮かばれるはずだ。

信親が思いを語ると、皆がそれぞれに頷いたが、ひとり資吉が首を捻っている。

「戦がすっかり終われば、武士は何をすればよいのでござるか？」

信親は資吉の逞しい肩に手を置いた。

「自慢の怪力を讃岐の国づくりに使え。皆で力を合わせて、争いのない豊かな国を作るのだ。日ノ本の乱世が終われば、敵も味方もない。友ならば、好きな時に会い、酒を酌み交わせよう。極楽のような時代がもう、すぐそばまで来ている。お主らは新しき世に何をするか、決めておるか？」

「わしは、長宗我部の若い者たちに、容赦なく一から武芸を叩き込みますぞ」

## 友よ 第10回

真っ先に答えた銅鑼どらこえ声は、隼人だ。土佐一國に皆が戻った。教え甲斐があると、鼻息が荒い。隼人は桑名の手から酒瓶を奪い取ると、信親の空いた杯になみなみと注いでくれた。終わると、すぐに桑名が酒瓶を奪い返す。その仕草さえ礼法かたに適っているところは、さすがに鼠先生だ。

「太平の世に武芸とは、いやはや。代わり映えせぬ男よのう。秀吉公からあらぬ疑いを掛けられてはかなわん」

酒を取られた仕返しなのか、桑名の冷やかしに、「何じゃと？」と隼人が凄んだ。この二人は、昔から信親の稽古事の時間を奪い合っていた因縁もあり、たまに衝突する。

「されば、太郎左。お主は何をするのじゃ？」

「これからは礼法の時代よ。それがしは岡豊城下に礼法を教える私塾を開く。さすがは長宗我部侍よと、誰もがため息を吐くような折り目正しい礼儀作法を、家臣団の老若男女に叩き込むのじゃ。腹の奥底、体の芯までな」

隼人が手を伸ばしてくると、桑名はついに酒瓶に口を付けて飲み始めた。礼法違反だ。

「意気込みは買うが、幼少から指南を受けた身としては、お主らに叩き込まれる側に、一片の同情を禁じ得ぬな。武芸も礼法も、自らを鍛え上げる道として大事だが、やりすぎは禁物だ。ほどほどにしてくればありがたい」

隼人と桑名は畏<sup>かしこ</sup>まって見せたが、どれだけ通じていることか。

「二蔵はどうだ？」

二人は顔を見合わせ、恥<sup>かたじけなく</sup>ずかしそうな顔をしていた。

「実は、竹細工を作って日ノ本中で売り歩きたいと思っております。以前、弥次郎<sup>やじろう</sup>から教えてもろうた技を世に問いたいのでございませぬ」

もし波川<sup>はかわ</sup>弥次郎が生きていたら、何をしたらろうか。たくさんやりた  
い事があると言っていた。

「拙者の夢は、側室を何人も待つこととござるな」

女好きを自称する資吉はこの春、仙石家臣の娘との縁組を危うく  
進められかけたが、ひどい不器量だと知り、逃げ回っているらしい。

「お前はまず、嫁を娶<sup>めと</sup>ることから始めたほうがよからうな」

再び資吉の首に腕を巻き付けながら隼人が茶化すと、皆が笑った。

「俺は土佐の国づくりだ。皆も手伝<sup>てつと</sup>うてくれ」

「ああ、拙者も、長宗我部に戻していただきとうござる」

資吉が口を尖らせる隣で皆が信親に畏<sup>おそ</sup>まった後、桑名が心持ち身  
を乗り出してきた。

「若殿。九州役を最後に、御館様は隠居なさると漏らしておられまし  
たぞ」

すでに三年ほど前から、元親と信親は知行<sup>あてがい</sup>の宛行、相続の安堵など  
重要な書状は二人の連名としてきた。元親を煩わすほどの話でなけ

## 友よ 第10回

れば、信親ひとりの名で書状を出している。

「こたびの戦も、父上には心配ご無用と申し上げよ」

信親は桑名を先に土佐へ返して秀吉の命を元親に伝えさせ、自らは明日、京を訪れる。

「若殿に全部お任せすればよいのじゃ」

隼人は顔が真っ赤だ。ずいぶん出来上がっている。

「ときに桑名、誰ぞ京を案内できる者はおらぬか。実は<sup>みお</sup>漣への土産に枕を買ってやりたいのだ」

「ちようどよいお人がほどなくお越しになりましたよ」

思わせぶりな桑名の顔で、すぐにわかった。

るいは諜報のために、畿内にいると聞いていた。るいを思うと、信親の心はたちまちときめく。昨夏、岡豊城から共に白地城へ向かった時以来、会っていなかった。

「さてと拙者は、小心者の主あつしに呼ばれておりますゆえ、これで失礼いたしまする」

資吉は隼人の太腕を首から外すと、名残惜しそうな顔つきで、信親に向かって手を突いた。軍監とされ、がぜん張り切り始めた仙石は鼻息が荒く、明朝早くに大坂を発つという。

酔って抱きついてくる資吉を宥めて送り出した時、小柄な影が夜の闇から現れた。るいは白藍色の小袖を着ていた。



晩夏の風に柳葉が揺れる川べりが眩しいのは、傾き始めた陽光に煌めく川面のせいか、それとも初恋の女性とふたり、異郷に旅しているせいか。

信親は、るいに声を掛けて木陰へ誘い、鴨川の辺に並んで座る。

「川の案内ばかりさせてすまぬな、るい」

京を訪れた信親がまず見たいと考えたのは、鴨川だった。

大坂を出てから淀川、桂川と船で遡ってきたが、史書にも記される川を自分の目で確かめたいと思った。木津川と宇治川は、明日以降だ。

「若さまの川好きは存じ上げておりますから」

るいは数えて三十路くらいになっているはずだが、出会った頃より若くさえ見えるのは、あの笑顔を惜しげもなく見せてくれるからだろう。瑠璃の首飾りがよく似合っていた。

——あれから、何をしていた？

とは、あえて問わなかった。綺麗事だけで世は回らない。乱世には政の闇の部分を担う者が必要なのだと、信親もわかり始めていた。るいは長宗我部のために動いているのではない。信親のためだ。昨年、長宗我部のかつての主筋にあたる一条兼定が急死したとの報が届いていた。るいの仕業ではないかと思うと、信親の胸が痛んだ。

身勝手な話だろうが、過去はもういい。

## 友よ 第10回

鴨長明かものちようめいが喝破かつぱしたように、川は過去の水など流していない。今ふたりの前にあるのは、人々がついに掴まんとする平和と、その空の下で輝き始めた未来だけだ。

「九州の役を最後に、父上は隠居なさる。るいの忍びとしての仕事も、終わりだ」

青空を見上げながら、るいがぼそりと呟いた。

「わたしはずっと忍びをしてきました。これからは、何をして生きればよいのでしょうかね」

「やりたいことを、やればいい」

「これまで命令に従って生きてきましたから……。何をしたらいいのか、わからないのです」

今度は鴨川の水面を見ながら、うつむき加減だ。

「ならば、土佐で猿猴えんこうを探し出してくれ」

るいが小さな声を立てて笑った。想い人が腹の底から笑えるようにしたい。あと少しだと、信親は思う。

今言っておかねば、るいはまた、どこかへ行ってしまふ。次こそ命を落とすかも知れない。だから、言おうと決めていた。

「九州の役から戻ったら、俺の妻になってくれぬか」

岡豊城には正室の滯がいるが、事情を話して、わかってもらう。側室を持つ大名はむしろ多い。信親も大人になったというだけの話だ。

「お断り、しても？」

## 友よ 第10回

「……なぜだ？」

るいの横顔を見ながら、信親は優しく尋ねた。

「もしも若さまのおそばにいられたらと、強く願ったこともございました。でも、わたしの手はもう、汚れすぎています。わたしが幸せになるなんて、世の中、変ですもの」

るいは自分の白い手を見つめながら、寂しげに微笑んだ。

「香宗我部の呪いは、わたしが悪事を重ねて自分で作った縛り。その血を宗家に入れるのは、不吉です。それに側室なんて、信親さまらしくありませんから」

信親はるいの手を握り締める。少し冷んやりしていた。

「乱世で人は、手を汚して生きる。俺も、戦で幾人殺したか知れぬ。誰かを守るためには、仕方がなかった。これからは、その償いのために生きるつもりだ。俺はるいにそばにいて欲しいのだ」

るいは川面を眺めたまま、しばらく何も言わなかった。

聞こえるのは、天下に名高い鴨川の落ち着いた川音だけだ。

やがてるいは小さく頷いて、信親を見た。

「忍びは毒も薬も作れます。どこかで薬師をして、病に苦しむ人を助けられれば、少しは罪減ぼしになるでしょうか」

良い考えだ。信親とは違ったやり方で、るいが乱世の傷を癒してくれるなら、土佐はきっと蘇ってゆくだろう。

「されば、四万十の近くに住めばいい。俺も時どき遊びに行く。猿猴

## 友よ 第10回

を紹介してくれ」

るいは声を立てて笑った。子猫と遊んでいた時の、あの笑顔だ。

「かしこまりました」

三条河原に立つと、ひがしやま東山連峰が見えた。

「るい、俺はもう少し上流を見たい。叡山えいざんも間近に眺められよう」

鴨川の辺から、るいが北東に坐す一番大きな峰を指差してくれたが、遠方に霞む姿はまだ小さすぎた。せっかく京まで来たのだ。ふたりきりの時間も、もっと楽しみたかった。

「では参りましょう。日が暮れてしまう前に」

ふたりは鴨川の上流へずんずん遡ってゆく。河口へ下り、あるいは逆に源流を探し求めるのは、川好きの性分だ。

右手からたかのがわ高野川が鴨川に合流する辺りで、空模様が急に変わってきた。

付近には人家もまばらだが、夕立ちに降られたふたりは、無人の荒ら屋へ駆け込んだ。稲藁の山の上に並んで腰かける。

「あの時も、ひどい雨でしたね」

なかとみがわ中富川の戦の後、ふたりは小舟の中で交わった。御曹司と忍びの宿命ゆえに、離ればなれになってはいても、ふたりの心はもう十分に通じ合っている。言葉は要らなかつた。

信親は体にまとわりつく小袖を脱いで、こめびつ米櫃にかけた。るいが立ち上がり、見上げている。るいの濡れた小袖を脱がせてやる。縋すがりつい



てくる想い人を、固く抱き締めた――。



五

今や土佐では、信親が当主同然に扱われている。出陣前の出丸にはひっきりなしに人が訪れ、始終賑やかだ。とはいえ、夜更けにはさすがに静まり返って、秋虫の集く声さえもまばらだった。

「買わせるのではなく、貴家から進呈する、と？」

突喰屋はやぶにらみの目で訝しげに信親を見た。この男には夜がよく似合う。

来る九州の役を見据え、信親は突喰屋の助言をもとに、早くから兵糧米を買い集めていた。この秋は土佐も豊作が見込まれており、兵糧には事欠かない。

「これまでの戦を考えれば、はるかに少ない兵糧で済むはずだ」

長宗我部勢は三千で豊後入りする。万の軍勢で四国を駆け巡ってきたことを考えれば、さしたる数ではない。戦慣れした将兵に絞り込み、残りの者たちは国づくりに励ませる。留守中は、叔父の香宗我部親泰に差配を頼んであった。

「商人としては、せっかくの儲け時なんですがね。他ならぬ長宗我部家のお買い上げとなりや、荒稼ぎするのは手前でもちよいと気が引けますな」

昔、るいとの〈恋〉という品を買って以来、突喰屋とは信頼を深め

## 友よ 第10回

てきた。

「気兼ねは要らぬ。四国勢がいがみ合うのも、元を正せば長宗我部の非だ。目には見えねども、交誼こうぎを買えるところと思えば、安いもの」

九州では戦乱が続き、国が疲弊している。現地での兵糧調達もままなるまい。九州在陣が長引いた場合、友軍である仙石勢、十河勢のためにも兵糧を用意したいと穴喰屋に頼んだのである。

「国が栄えねば、商人も富まぬ。引き続きそなたの力を借りたい」  
信親が頭を下げると、穴喰屋はにんまりと笑った。

「承知しやした。信親衆の治められる国が楽しみですわい。これから土佐は、もつと儲かりそうじゃ。先だつての四万十の屋敷の件と合わせて、お任せくださいれ」

忍びのように音も立てずに豪商が去ると、入れ替わりに白い寝着姿が部屋に入ってきた。

「まだ起きていたのか」

澪がものも言わずに縫すがりついてくる。

出陣前には女を避けるのが戦国の習わしだが、好き合って結ばれたふたりは、気にしていなかった。優しく抱き寄せる。

「小滝は寝たのか」

「いつものように、ぐっすりと」

「留守を頼む。次の夏までには戻って来る」

澪は信親の腕の中で小さく頷いている。

## 友よ 第10回

「どうかしたのか」

「義父上さまがご出陣遊ばすなら、信親さまが留守居をなさっては如何いかにございましょう？」

信親は声を立てて笑った。

「戦をやるのはこの俺だ。父上は俺が心配だからと、従いてこられるだけだ」

「不安でなりませぬ」 溲うらにしては珍しく甘えていた。

夫婦になってから、溲は武家の妻として毅然と夫を送り出してきた。どうしたのだろう。

「これまで、もっと危ない戦から無事に戻ってきたではないか」

胸に温かいものを感じた。泣いているらしい。信親は愛しい妻をしつかりと抱き締めた。



六

長宗我部家の湊、浦戸うらどから、九州へ向かう関船せきぶねが一斉に動き出した。

上棚うわだなに積まれた米俵の隙間に身を潜めながら、千熊せんくま（後の長宗我部盛親もりちか）は胸を躍らせた。密航は成功だ。

——これで、初陣できる。

「千熊さま、おとなしゅう出て来なされ。若さまがお待ちでございませよ」

落ちていた女の声が聞こえると、千熊は舌打ちした。るいは女なが

## 友よ 第10回

ら家中随一の忍びで、息を呑むほど綺麗な女だった。なぜこんなに早く見抜かれたのだ。

甲板へ連れ出されると、笑顔の兄の隣に、谷彦十郎がすっとぼけた顔で立っている。

「はかったな、彦十郎！」

味方だったはずだが、最初から騙っていたわけか。

「お赦しください、千熊様。兄君のお世話だけで、精一杯にごさいますれば」

「千熊の分までお主の毒舌が増えては、長宗我部の士気にも関わらずゆえな」

信親の返しに、彦十郎は苦笑している。この二人は主従のはずだが、全然そのようには見えない。

長身の兄がやってきて、千熊の頭の上に大きな手を置いた。

「お前はまだ十二だ。戦などまだ早いと言ったであらうが」

信親は十四歳で初陣を果たし、敵将を討つ手柄を立てたと聞く。だが、信親は己の手柄とは認めず、記録にもそう記されてはいない。

「知っておるか、千熊。戦とは、人が人を殺める場だ」

当たり前ではないか。千熊は馬鹿にされた気がして、奥歯をぐっと噛み締めた。

「俺は戦が大嫌いだな。人が殺し合う世は間違いだ。のんびりと良き川でも眺めながら、友と美酒を酌み交わすほうが、ずっと楽しくて幸

## 友よ 第10回

せに決まっている。戦のせいで忙しゅうて、俺はいまだに猿猴に会えずじまいだ。天下泰平は目前にある。俺たちを、あの地獄を味わう最後の世代にしたい。お前たちにはもう、辛い思いはさせぬ」

弟思いの兄の気持ちをわかってはいた。だが千熊は、自慢の武芸を初陣で試したかった。元親に直談判して一旦は許されたのに、信親の言葉で翻意してしまった。それでも、こっそり軍船に乗り込み戦地に着いてしまえば、従軍は認められるだろうと考えていた。

「兄上のような将になろうと、せっかく武芸の鍛錬をしてきたのです。何卒お連れください！」

千熊が噛み付くと、信親は白い歯を見せて笑った。

「鍛錬のおかげで心身が強くなったろう。それで良いのだ。これから、国と民を富ませるために頭と力を使う。敵も味方もなく、日ノ本じゅうに友を作れる時代がやってくるのだ。俺はお前のように、もつと遅うに生まれたかった。そうすれば生涯、人を一人も殺めずに済んだやも知れぬ」

周りを見渡すと、信親衆の面々が勢揃いして千熊を見ていた。

「全部お見通しで、おれを罫に掛けたのでござるな？」

「俺の軍師の策は、天下一品だからな」

「おれも、兄上のお役に立ちとうございまする！」

信親は千熊が憧れる自慢の兄だった。

家臣たちからも、民からも好かれ、強くて、優しい。次兄の親和ちかかずや

## 友よ 第10回

三兄の親忠ちかただと違って、千熊を可愛いがってくれた。馬鹿な真似をした時は一生懸命に叱ってくれた。信親は千熊にとって、誇りだった。初陣をしたいというのはい訳で、本当は信親と一緒にいたいだけだ。兄といられる信親衆が羨ましかった。

「お前には土佐の国づくりをたっぷり手伝ってもらおう。さればさっそく頼んでよいか？」

「今のおれなんぞに、何ができると仰せじゃ？」

「城下へ行け。田畑を訪ねよ。民が何に困っているか、ようよう聞いておいてくれ。帰国したら、皆のためにどうすれば良いか、一緒に知恵を絞ろうぞ」

だが、船団はずっと進んでいる。このまま行ったら駄目なのか。

「今さら浦戸へ戻るつもりでござるか？」

「三千の兵での航海は初めてゆえ、試しにぐるりと回ってみただけだ。船はじきに浦戸へ入る」

千熊は聞こえよがしに舌打ちしてみたが、それほど悔しくはなかった。信親が戻って来たら、民が何を言っていたか、逐一伝えるのだ。頑張れば、信親は必ず褒めてくれる。

「隼人、岸まで千熊を送ってやってくれ。手荒な真似はするなよ。俺の大切な弟だからな」

「承知してござるわ」

福留隼人は家中一の剛の者だ。隼人の巨体がのっそりと動き、「参

## 友よ 第10回

りますぞ」と千熊の二の腕をがしりと掴んだ。

「兄上、戻られたら、薙刀なぎなたの稽古を付けてください」

信親は強い。今ではあの隼人よりも強いのではないか。立ち合うだけで、金縛りに遭うような気迫を感じて、千熊は動けなくなる。信親のように強くなりたい。

「ああ、体を鍛えておけ。土産話もたっぷり持って帰る」

「千熊様、お覚悟あれ。若のことだ、話の大半は九州の川の話でござるからな」

彦十郎の毒舌に、家臣たちが遠慮なく笑っている。

信親はいつも家臣たちと共にあって、駄だ法螺ぼらを吹き合い、楽しげに笑っている。あれは主従ではない。まるで友垣ともがきだ。早くあの仲間に加わりたいと、千熊はずっと思ってきた。

「何を申すか。千熊はいつも俺の川の話の話を熱心に聞いてくれるぞ。お前も川が好きなのだろう？」

「もちろんでござる！」

本当は違う。千熊が好きなのは川ではなく、兄のほうだ。

それでも、信親はとびきり嬉しそうな顔をした。

「俺が忙しゅうて延びておるが、兄弟四人で四万十へ行こうぞ。猿猴に会わせてやる」

信親は第三人とそれぞれ仲がよいが、弟同士は疎遠だった。千熊は岡豊にいたが、次兄と三兄が養子に出ていたせいもある。だが信親さ

## 友よ 第10回

えいれば、仲良くできるに決まっていた。

船足が緩くなった。もうすぐ浦戸か。

千熊が船べりに寄ると、すでに小舟が付けられていた。信親主従は  
実に手回しが早い。舟に乗っている二蔵が口あくびに手を当てて欠伸をし  
ていた。

隼人を振り切って、信親にしがみついた。

遅しい大きな体だ。兄のような男に、千熊はなりたいたい。

(続く)